

令和5年度 学校評価表																	
学校教育目標		社会で通用する基礎・基本を磨き、 よりよい自分・学校・社会を目指す生徒の育成															
a ミッション 【地域・社会における 本校の使命・存在意義】		地域に誇れる学校づくり ～ 地域からの期待に応え、期待を超える学校づくりを ～					a ビジョン 【実現しようとする 本校の将来像】		○オール因島南（学校・家庭・地域）で、連携・協働し、生徒を育む学校 ○学校・地域（ふるさと）を誇り、自分の生き方を見つめ直すことに繋げる学校 ○社会の変化に対応し、向上心を持ち、思いを実行に移せる学校								
評価計画							自己評価					学校関係者評価			改善計画		
	b 中期経営目標	c 短期経営目標	d 目標達成のための方策	方策による教師の取組	e 評価指標	f 目標値	7月	1月	h 達成度	i 評価	j 結果と課題の説明	k 二次評価			l コメント	m 改善案	
							g 達成値	g 達成値				イ	ロ	ハ			
育成する資質・能力 「基礎・基本の力」「思考力・表現力・対応力」「高い志とチャレンジ精神」	確かな学力の育成	本質的な問いに基づいた単元を貫く問いや、個別の問い（学習課題・ミッション）を工夫し、授業をファシリテートすることで、生徒の意欲や探究心を高め、表現力を育成する。	【授業改善の推進】 ○授業のめあて、振り返りとゴールイメージを持ち、授業をファシリテートできる教職員の育成。 ○電子黒板・大型ディスプレイと板書の併用、タブレットを活用した授業づくりの推進。 ○これらを活用した授業スタイルの確立。	T01：毎時間の授業でめあて、ミッションを常に提示 T02：毎時間のふり返しシートの実施 T03：週1回以上の電子黒板・大型ディスプレイと板書との併用 T04：週1回以上の生徒タブレットの活用	S1～10「〇〇の授業は、「できた」「わかった」と感じることがある。」と答えた生徒の割合（全教科平均）【7月・11月実施】（昨年度79%）	80%	85.0%		106.3%	A	昨年度より生徒の肯定的回答の割合は4ポイント上がった。教師の「めあて」、「ミッション」を掲示（教師アンケートでは93.3%）と「振り返り」の実施（教師アンケートでは81.7%）ができ、本校の授業スタイルが定着しつつあることが要因の一つであると考えられる。4月・6月に標準学力調査（国社数理英）を実施し、今後生徒の課題を分析し、次の授業改善につなげていく。	○			・授業が分かる生徒85%と、平日の家庭学習1時間の生徒83%の回答と同様ではないか。 ・タブレットの使用率49%は少ない。これからは電子黒板と同様の活用頻度が求められている。 ・タブレットを時間のすべてで活用するのではなく、必要なパート、5分・10分で活用する。 ・基礎学力の定着に力を入れているのかわかる内容でした。 ・教職員がファシリテートする授業のイメージについて共通理解できているか確認する必要がある。	・タブレットの授業での使用率を上げるために、まず、教職員がタブレットを使う習慣を身に付けさせる。（研修や職員朝会でのタブレットの利用） ・授業交流週間を9月に実施し、どの教職員も必ず1回示範授業し、2回以上参観授業を行うことで、自身の授業を客観的に評価し、授業改善に向けての共通理解を高めたい。	
		「社会で通用する基礎・基本」を身につけ、活かすことができる生徒の育成。	【基礎学力の定着】 ○「学びのサイクル」の充実・発展 ・授業と家庭学習と南中タイムと試験を連動させ、個別指導に取り組む。 ○様々な場面ででの振り返りの実施 ・授業、生徒会、学校行事などのめあて、振り返りとゴールイメージを持って指導を行う。 ○家庭学習習慣の定着に向けて ・委員会による課題提出の取組 ・保護者連携	T05：毎週の自学（宿題）の提示 T06：南中タイムでの個別支援の実施 T07：学校行事などの取組の振り返りの実施 T08：委員会による課題提出の取組の実施の徹底（学級での声かけ、ホワイトボードによる提示、屋の放送での発表） T09：課題提出の難しい家庭への保護者連携の実施	S22：「平日の家庭学習時間平均が1時間以上」と答えた生徒の割合【7月・11月実施】（昨年度74%）	80%	83.0%		103.8%	A	昨年度より生徒の肯定的回答の割合は9ポイント上がった。しかし、教師アンケートによる毎週の自学の提示の割合も61.4%であり、各教科の宿題を提示できていない状況がある。授業と家庭学習と試験を連動させ、学びのサイクルが充実できるように、自学の提示、家庭学習の指導を学校全体で行う必要がある。	○			・「家庭学習習慣」に加えて読書習慣なども実態を掴んでも良いと思う。 ・各教科と総合的な学習の時間に繋がりを持たせている取組は有効だと思います。 ・家庭学習の時間や内容をタブレットに入力、継続すれば学習傾向がわかり、偏りを直してより良い学習プランを立てるアドバイスもできる。 ・課題の出し方も従前のように学力向上のために出すのではなく、試験で不十分なところを補填する考え方や、全員一律といった考え方から個に応じた対応を考えていくことが必要になってくる。	「朝の読書」ができていて、と肯定的に答えた生徒の割合は、8.3%であった。朝読での読書活動の推進はもちろん、委員会活動による読書習慣を身に付けさせる取組も行いたい。 ・定期試験の学習計画表で計画を立てる際に、タブレットに入力する活動を委員会活動の中で取り組む。 ・宿題、自学、予習復習など、課題の提示の仕方についての共通認識を図る。	
		学校・地域（ふるさと）を誇り、自分の生き方を見つめ直すことができる生徒の育成。	【ふるさと学の推進】 ○各教科、道徳、特別活動と総合的な学習の時間「ふるさと学」を関連させる。 ○『プラスワン作成・助言→取り組み・実践→自己評価・他者評価→反省・改善→新たなプラスワン作成』のサイクルの定着と充実に向けた指導を進める。 ○表現活動の充実 ・自己表現の取組や、毎週の学年集会、各学期での意見発表の実施	T10：総合的な学習の時間「ふるさと学」と各教科、道徳、特別活動を関連させる。 T11：プラスワンを毎学期作成、提示し、自己評価・他者評価を行う。 T12：各学年で毎週の意見発表の実施 T13：各教科や学校行事における様々な場面で自己表現する意欲や力を高める指導の実施	S36「自分の意見を、言葉の使い方や表現を工夫しながら伝えることができる。」と答えた生徒の割合【7月・11月実施】（昨年度72.5%）	80%	83.0%		103.8%	A	昨年度より生徒の肯定的回答の割合は10.5ポイント上がった。毎週水曜日に学年集会で生徒による意見発表を実施（教師アンケートでは96.7%）により、数値が上がったと考えられる。一方で、意見発表の内容の指導の充実の仕方を国語科や学年で連携する必要がある	○			・次の目標や方策の検討を!! ・伝統や学校文化の継承から脱皮して新たなものを検討していく時期かもしれない。 ・地域活動や伝統行事で地域と共に活動することにより、社会で通用する力を身につけることも大切である。 ・探究的な学習を進めるために必要な力は、これからの時代、教科学力と同じくらい必要となります。中高の交流も検討してほしい。	・現在の学校の教育活動は意見発表等の取組をやるのが目的になっているのが課題の一つである。何のために行うのかを明確にし、生徒実態も踏まえて、学習発表会等の取組を計画する。 ・コロナ禍によって削減された学校行事や取組を見直して、よりよい取組になるように地域貢献活動などの計画を立てる。 ・英検の取組など、中高の交流も進めたい。	
豊かな心の育成	豊かな心の育成	生徒個々に応じた支援により、不登校生徒を減少させる。	【個々の生徒に応じた支援の実施】 ○不登校対策シート（目標・取組の方向性・反応）に基づく支援を進める。 【生徒理解の推進】 ○実態調査に基づく生徒理解を進める。 ○全職員・全生徒の全員面接の実施	・不登校対策シートの記録、更新 ・教育相談委員会の月2回実施 ・2日連続欠席生徒への家庭訪問、連続欠席の生徒への週1回以上の家庭訪問実施 ・生徒理解の校内研修を学期1回実施 ・アセス年2回実施 ・SC、SSWによる研修年2回実施 ・「絆全員面接」と「担任面接」学期2回実施	・不登校生徒の減少：目標10人（昨年度13人） ・昨年度不登校生徒のうち好ましい変化が見られるようになった生徒数の増加【毎月集計】	90%	30.8%		34.2%	D	・13人の生徒のうち、5人は大幅に欠席日数が減少した。SSWとの連携が活発になり、SSWによる保護者面談や家庭訪問によるサポートも効果的であった。 ・継続した取組となるよう、不登校対策シートや教育相談委員会の内容等の改善を2学期以降図っていく。 ・学級の一部に馴染めない生徒もあり、対人関係能力を育成する必要がある。	○			・全校を上げてソーシャルスキルトレーニングの機会を設けてほしい。 ・不登校については小学校から続いているのか、中学校からなのか小学校としっかり連携して根気よく取り組んでほしい。 ・教職員と生徒の繋がりを深めるために「絆面接」はいいと思います。調査で測れない思いが把握できると良いと思います。 ・学歴だけが求められるのではなく、社会で必要な力が身につけているかどうかが必要になってくる。評価DはB～Cでも良いのでは。	・教育相談委員会を計画的に開催し、不登校（傾向の）生徒に対する取組を意図や目的をもって進める。 ・SCやSSWとの連携を積極的に行う。 SSWと役割分担を行いながら、生徒・保護者への取組を進める。SCと担任の面談を行い、SCからの助言も参考にしながら学級経営を進める。 ・2学期も「絆面接」を実施し、生徒と教職員のつながりを広げ、深める。 ・2学期に全学級でソーシャルスキル育成の学活を行う。	
		よりよい自分、よりよい学校をめざす生徒の育成。	【基本的生活習慣の確立】 ○毎月、生活における重点項目を設定して取組を進める。 【生徒会活動、学校行事の充実】 ○めざす生徒像を明確にして、取組を進める。 ○校内ボランティアの実施。	・今月の重点項目を共有し、毎日指導。 ・活動行事を通して、生徒に目指す姿を指導した。 ・校内ボランティア学期2回実施	毎月の「重点項目を守って生活している」生徒アンケート集計【毎月実施】	90%	85.3%		94.8%	B	・生徒会の学級委員会と連携し、生徒たち自身に学校生活の課題を考えさせ、重点目標を設定していく。そして、生徒に対しても、教職員に対しても周知徹底に更に努める。 ・生徒アンケートでは、学校生活の実態を反映していない面が見られるため、2学期以降は、重点目標について教職員のアンケートも実施してみる。	○			・ワンチャンス、一過性だけでなく長期的、継続性を意識していく必要を感じる。 ・授業や行事以外に、校外で活動することは非常に良いこと、生徒の大きな成長につながる。確かな学力にも深く関係することであり大いに活性化させたい。 ・ふるさと学とのつながりで地域での活動を期待します。	・「ふるさと学」を通して、郷土愛や郷土の一員としての自覚・責任を考えさせていく。そして、学校・生徒会が主体となり、地域の活動を設けていく。さらに、地域主体の行事も生徒たちが参加できる機会ととらえ、生徒への呼びかけを積極的に行う。	
		よりよい自分、よりよい学校をめざす生徒の育成。	【信頼される学校づくり】 ・業務の進め方の改善 ・個別の業務の精選と効率化の工夫 ・不祥事防止委員会と服務研修の実施 【働き方改革の推進】 ○働き方改革の意識向上 「自分も起点」という位置に立ち、協働して取り組む教職員組織の育成。 ○超過勤務時間の削減 ○退校時刻の設定と60分前の声掛け	・学校だより月1回以上の発行 ・CoDMONのアンケート機能や資料室機能の活用週1回以上 ・服務研修月1回実施 ・働き方改革アンケートを毎月実施し経営会議で分析	学校だより月1回以上の発行、CoDMONのアンケート機能や資料室機能の活用週1回以上	80%	100.0%		125.0%	A	・学校だより、月行事予定、参観日や行事のお知らせなど、週1回以上活用することができた。あわせて保護者アンケートや不審者情報など活用の幅は広がっている。保護者の需要を把握して有意義に活用していきたい。	○			・「働き方改革アンケート」の数値の好転結果を生徒に還元。 ・残業、遠距離通勤など労働環境改善に取り組んでほしい。 ・因島南中職員ポータルの取組は良いと思います。働き方改革への多くの積み重ねがよくわかります。 ・業務のスクラップを継続検討すべきです。 ・多忙な中、先生方のアンケートが結果が非常に良いことが素晴らしい。意欲やモチベーションが下がるとミスが増加し悪循環となる。	・ICT活用により学校情報をよりいっそう保護者に周知する。 ・スクラップ＆ビルドのアイデアを職員からも吸い上げ、業務改善を進める。 ・職員ポータルの利用を進め、情報共有を進める。 ・毎月の職員アンケートを継続し、学校評価を意識した振り返りを経営会議に組み込む。 ・定時退校や超過勤務の把握を学年主任を中心に行い、学年部ごとに声を掛ける。	
信頼される学校づくりと働き方改革の推進							働き方改革アンケート肯定的評価全項目の肯定的評価平均80%以上【毎月実施】【市：6月・11月実施】	80%	89.6%		112.0%	A	・10項目のうち4つが100%、3つが90%以上、2つが80%以上となっているが、7番のスクラップ＆ビルドが50%と極端に低い。取り組んできたスクラップを整理し、教育的効果の向上とスクラップのバランスを考え取り組みたい。	○			
							水曜日の定時退校日に17:30までに退校できた職員の割合	80%	57.8%		72.3%	C	・以前に比べると定時退校日は意識が上がってきたが、80時間を超える職員の割合は高い。 ・生徒や保護者の都合に合わせて定時退校日をそろえることが難しい。				
【自己評価 評価】 A：100≦（目標達成） C：60≦（もう少し）<80							B：80≦（ほぼ達成）<100 D：（できていない）<60					【外部評価】 イ：自己評価は適正である。ロ：自己評価は適正でない。ハ：わからない。					